

感覚統合理論による要所の景観表現

岩手大学 学生員○村上亜矢子
岩手大学 正 員 赤谷隆一

岩手大学 正 員 安藤昭
岩手大学 正 員 南正昭

1. はじめに

地区景観と要所の景観にマトリョーシカモデルを仮説立て、感覚統合理論による体系化を試みる。

2. 研究の目的

現在新都心として開発している盛岡駅西口地区に位置する盛岡駅西口広場の景観デザインを、感覚統合理論を適用して行う。

3. マトリョーシカモデル

本研究では、「都市景観の一部である地区景観や地区景観の一部である要所の景観も都市景観と同じ景観モデルを適用できる」と仮定し、これをマトリョーシカモデルと呼ぶものとする。

このマトリョーシカモデルの特色は、

「地区景観・要所の景観は都市景観の一部をなす入れ子である」

「都市景観・地区景観・要所の景観のいずれも同じモデルで解釈とデザインができる」

としている点である。

マトリョーシカモデルに当てはめた解釈モデルを図-1に示す。



(ロシア人形のマトリョーシカ)

都市景観

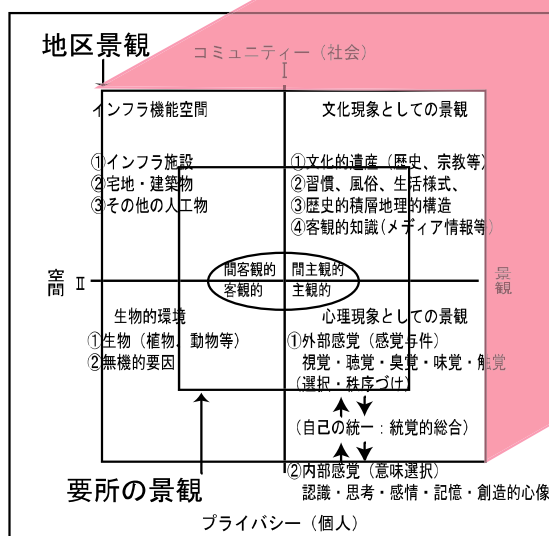


図-1 マトリョーシカモデルをとりいれた景観解釈モデル

キーワード：感覚統合理論，マトリョーシカモデル

連絡先：〒020-8551 岩手県盛岡市上田4丁目3番5号 岩手大学大学院工学研究科建設環境工学専攻都市計画学研究室
TEL：019-621-6453

4. ケーススタディ

要所の景観デザイン

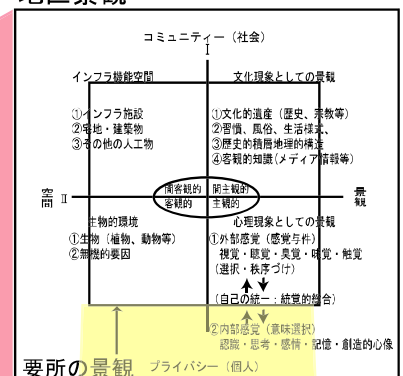
景観解釈モデルと景観デザインモデルを、実際に景観デザインを行うことによって説明していく(図-2)。ケーススタディの対象地区として、現在開発が行われている雫石川盛岡駅西口地区を取り上げる。

はじめに雫石川盛岡駅西口地区を景観解釈モデルに沿って解釈し、地区の現状・問題点を把握する。そして地区の全体像が把握できたら次は景観デザインモデルに沿って地区の風土イメージを抽出し、抽出されたイメージの内容を整理しながら地区全体の構造を考えていく。地区のマクロ構造の段階をデザインし終えたら、地区をいくつかの要所に分けそれぞれの使用目的にあったデザインテーマを要所ごとに決め、要所の景観デザインを行っていく。

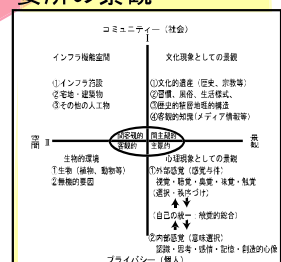
(1) 雫石川盛岡駅西口広場の要所の景観デザイン

景観解釈モデルによって得ることができたこの地区の問題点を以下に3つ挙げる。

地区景観



要所の景観



- (1)地盤が弱くさらに堤内地の方が地盤が低い
- (2)コミュニティ空間やプライバシー空間を考慮した空間が少ない
- (3)歴史・民族・産業・自然などに関する資料を展示している場所が少ない

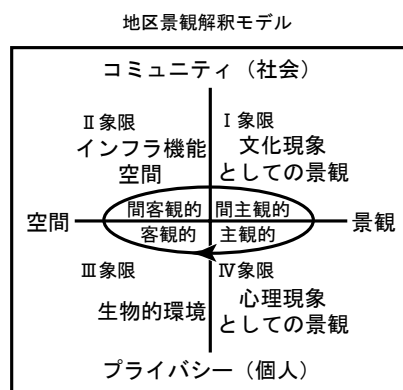
そしてこの問題点から4つの課題を挙げた。

- (1)地盤を強化し、災害に強いまちづくり、つまりスーパー堤防を考慮したまちづくり。
- (2)盛岡らしさ、つまり山並みと河川風景を取り入れた新都心の形成。
- (3)人と人がふれあえる、つまり人と人との絆を大切にするまちづくり。
- (4)生物の多様性、つまりエコロジカルミュージアムからのまちづくり。

実体 様々な問題点を含むありのままの地区の現状。



理論 解釈モデルの4つの視角について情報収集。



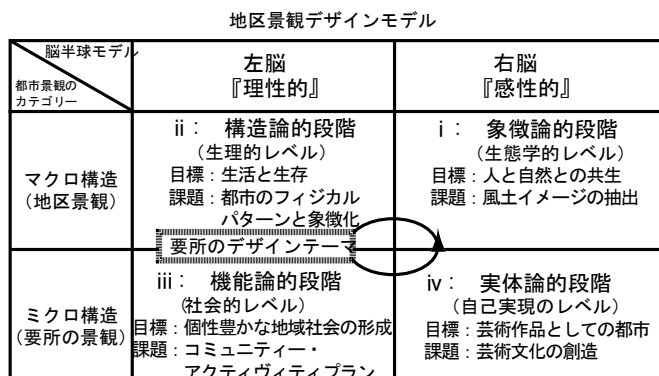
現状の問題点を浮き彫りにする。



理念 デザインの目指すべき方向性、理念目標を設定。



理論 デザインモデルの各段階で必要な情報の収集を行い、要所のデザインテーマを決定し、要所のデザインを検討する。



新たな実体 新たな要所の景観の創出。

図-2 景観デザインの手順

景観解釈モデルから得ることができた地区の課題から、この地区のデザインの目指すべき理念を4つ挙げる。

- 身近に感じる水辺空間と山並みの眺望を通して 地球環境の保全を考える。
- 人・情報・技術が集約し、中枢地区としての役割を果たす。
- 「住(生活)」「職(産業)」「学(教育)」「遊(商、文化)」が融合した居心地良い地区の形成。
- ゆとりが生まれる環境の創造。

そしてこの理念を基調に盛岡駅西口広場のデザインテーマ、「自然との共生、タウンミュージアム」を決定する。



図-3 盛岡駅西口広場の鳥瞰図



図-4 人工地盤から河川敷の眺め



図-5 盛岡駅西口広場の位置

参考文献

- 1) 安藤昭, 赤谷隆一: 感覚統合理論による都市景観設計の体系化, 土木学会論文集, No. 653/ -48, pp.63-75, 2000
- 2) 水出佳奈, 安藤昭: 感覚統合理論による都市景観設計の体系化に関する研究(その), 第3回観光まちづくり学会研究発表会, 3-1